

【優秀論文】

太宰治『ヴィヨンの妻』にみる夫婦像

～許す・許されることによる幸福感～

3年5組 23番 奥野 彩英子

I はじめに

退廃的な思考を持ち、自己否定に頭を悩ませ続けた作家・太宰治は数多くの作品を世に遺した。その多くに「私小説」的作品が含まれていることでも知られる。本論文ではその内の『ヴィヨンの妻』を対象として取り上げた。まず大まかに内容と先行研究について触れた上で、主要人物である夫婦の関係について問題提起を行う(II章)。次に夫婦それぞれの人物像を分析したのちに(III章)、夫婦の関係の変化となぜ変化し得たかを追っていく(IV章)。そして最後に、本作から読み取れる「主人公夫婦の幸福」について考察していきたい(V章)。

II ヴィヨンの妻

『ヴィヨンの妻』は太宰治が没する一年前の1947年に発表された作品であり¹、晩年の太宰治の作品の中でも傑作とされているものの一つだ。2009年には映画化もされた²。なおタイトルにある「ヴィヨン」とはフランスの詩人の名で、様々な悪行を働いたのちに懺悔や反省を詩によんだ稀有な作家である。作中には大谷の書いた論文のタイトルとしてその名前が登場している。

あわただしく、玄関をあける音が聞えて、私はその音で、眼をさましたましたが、それは泥酔の夫の、深夜の帰宅にきまっているのでございますから、そのまま黙って寝ていました。³

冒頭の一文だけで夫の不貞ぶりと、それに対する妻の反応からその常習性がみてとれる。物語が進むにつれ、夫の「大谷」がいかに自分本位な人物であるかが語られていく。そしてそれと対比するように感じられるのが、妻の「さっちゃん」が持つ夫への柔軟さや寛容さだ。しかし、この夫婦の特筆すべき点はお互いに「無干渉」だという点である。夫婦でありながらもさっちゃんと大谷の間に家庭的な暖かさは感じられないのだ。『ヴィヨンの妻』論はそのほとんどがこの大谷夫婦から自論を展開している。それらは主に語り手であるさっちゃんを中心に据えたものが多い。近年の先行研究では、山崎正純がさっちゃんを「母ではなく娘」と称し、母という立場としてのさっちゃんを読み解いている⁴。また、榊

¹1947年3月『展望』掲載。

²2009年10月10日公開。配給は東宝。

³太宰治『ヴィヨンの妻』(新潮文庫、1950年発行 p104) 以下本文よりの引用は同書による。

⁴山崎正純「『ヴィヨンの妻』—『妻』は語るができるか」(『国文学 解釈と鑑賞』第72巻11号

原理智はさっちゃんを通して家庭における「妻」の立ち位置を論じた⁵。大谷は至って自己中心的に生活を送り、さっちゃんはそれをただ受け入れるだけだ。なぜさっちゃんは大谷を受け入れ続けることができるのか。そしてこの夫婦における幸福とは何なのか。さっちゃんだけでなく、大谷とさっちゃん二人の人物像をそれぞれふまえた上で、二人の関係性から考察していく。

Ⅲ 大谷とさっちゃん

(1) 大谷という人物

大谷は所謂良い夫とはいえない。書生ではあるが収入は不安定で、家庭を顧みず、愛人を作っては飲みに行き、ツケを貯め、挙句の果てにその店から金を盗んで逃げ帰ってくるような人物だ。ところが至って排他的であるかと思えば、女性に対しての魅力はあるようで、借金を肩代わりしてくれるような愛人がいもする。いくら反道徳的な行いを為しても大谷は社会から追い出されることはないのだ。福田清人と板垣信が共著でも述べているように、「彼にとって所謂道徳は何の意味もない」⁶のである。

しかし一方で、大谷が夜中に起き出してさっちゃんにしがみつき、「ああ、いかん。こわいんだ。こわいんだよ。僕は。こわい！たすけてくれ！」⁷と自らに巢食う得体のしれない恐怖を訴える場面がある。このように大谷には「聖書でいう、原罪意識のようなもの」に常に苛まれ、怯えている部分が度々みられるのだ⁸。

「僕はね、キザのようですけど、死にたくて仕様がななんです。生れた時から、死ぬことばかり考えていたんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」 / 「お仕事が、おありですから」 / 「仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしません。人がいいと言え、よくなるし、悪いと言え、悪くなるんです。ちょうど吐くいきと、引くいきみたいなものなんです。おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、ということなんです。いるんでしょうね？」 / 「え？」 / 「いるんでしょうね？」 / 「私には、わかりませんわ」 / 「そう」⁹

このように作中には、大谷が自分の考えをさっちゃんに確かめさせるシーンが何度か登場する。最後の場面でも新聞に書かれた自分への批評に対し、自分が批判のとおりでないことをさっちゃんに同意を求めるように言い聞かせている。さっちゃんは大谷にとって妻であると同時に、最も身近な他人である。世間から見た自分の姿を弁明する姿勢から、大谷の自尊心の高さを普遍性や調和からの脱却の表れとみることができる。これを踏まえて、ここでの大谷のいう「神」とは宗教的な意味での神ではなく、自らへ向ける他者の視線と

至文堂 2007年 p.169-174)

⁵神原理智「太宰治『ヴィヨンの妻』試論—『妻』をめぐる言説—」（『日本近代文学』第54号 日本近代文学学会 1996年5月 p.108-122）

⁶福田清人、板垣信『人と作品1・太宰治』（清水書院、1966年 p182）

⁷ p125

⁸同前

ほぼ同義であると考察する。要するに大谷は自分にとっての「神」、つまり「他人」からの許しとして肯定を求めているのだ。したがって大谷は傲慢で自分本位な人物である反面、常に自分を否定し、他者からの肯定を求め続けている人物であるといえる。

(2) さっちゃんという人物

さっちゃんは素直な人物だ。彼女は普段、可愛らしくも手の掛かる幼子を一人で抱え、少ない収入をやりくりし、腐りかけているような畳や破れほうだいの障子に囲まれて生活を送っている。そして年上の夫の浮気を感じながら、またその事実が明らかになっても現状を素直に受け入れて、変わらず暮らし続けるのである。しかしだからといって主体性が無いのではなく、むしろその反対だ。さっちゃんは大谷とは違ったニュアンスでの自分本位的な物言いをすることがある。それらは特に大谷と会話をしている時に顕著に表れている。例として大谷とさっちゃんが帰路を共にする場面が挙げられる。

「なぜ、はじめからこうしなかったのでしょうかね。とつても私は幸福よ」/「女には、幸福も不幸も無いものです」/「そうなの？そう言われると、そんな気もしてくるけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」/「男には不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」/「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとうございますわ。椿屋のおじさんも、お婆さんも、とてもいいお方ですもの」¹⁰

彼女はこのように大谷の意見を否定することなく、しかし素直に自分の意見を交えている。大谷を否定しないからといって、肯定するわけでもないのだ。

また、さっちゃんは素直で純心な面とともに客観的で淡泊な面も持ち合わせているといえる。例えば大谷が金を持ち帰った夜にさっちゃんに優しく声を掛けた際には夫の優しさを喜ぶよりも、普段と比較し「うれしいよりも、何だかおそろしい予感で、背筋が寒く」¹¹ なったと述べている。他にも大谷の悪行を伝えられたにも関わらず「理由のわからない可笑しさが、ひょいどこみ上げ」¹² と思わず嘔き出してしまう場面がある。まるで夫と自分とは一線引いた立場であるかのような反応なのだ。さっちゃんは大谷の妻であることを自覚している。だからこそ大谷の借金を自らの責任として受け止めることが可能なのだ。しかしそれ以前に彼女にとって大谷は最も身近な他人でもあることをさっちゃんは忘れていない。したがって身内の自分だけではなく、他人の自分からみた大谷を捉えることが出来るのである。つまり大谷に接するさっちゃんは、献身的な「妻」でありながら大谷への幻想を一切抱かない「他人」としての一面も持っているのだ。

素直に大谷を受け入れ、肯定も否定もしないのがさっちゃんである。常に自分を否定し、他者からの肯定を求めている大谷にとって彼女は「家庭のマリア」¹³ とも呼べるような、彼自身の「原罪意識」を和らげることのできる重要な存在だといえる。

¹⁰ p137

¹¹ p105

¹² p116

¹³ 三好行雄「ヴィヨンの妻」 長部日出雄編『群像 日本の作家 17 太宰治』（小学館 1974年 p177）

IV さっちゃんと大谷の関係の変化

(1) 椿屋で働き出す以前の夫婦関係

そうしてこの子は、しょっちゅう、おなかをこわしたり、熱を出したり、夫はほとんど家に落ち着いていることは無く、子供の事などなんと思っっているのやら、坊やが熱を出しまして、と私が言っても、あ、そう、お医者さんに連れて行ったらいいでしょう、と言って、いそがしげに二重廻しを羽織ってどこかへ出掛けてしまいます。お医者さんに連れて行きたくっても、お金も何もないのですから、私は坊やに添い寝して、坊やの頭をだまって撫でてやっているより他はないのでございます。¹⁴

大谷の家庭への関与の薄さを呈する事例として、息子のことが挙げられる。この息子が発達不足気味なことにさっちゃんは頭を悩ませながら子育てに励んでいる。しかし大谷は息子の育成について干渉しようとしな。更に前述にあるとおり大谷家は貧乏だ。ところが大谷はそのことを承知していながらも、家のことはさっちゃんに任せきりで自分は奔放に過ごしているのである。つまり子供に関する喧嘩も起きないほどに、夫婦間で別離した子育てなのだといえる。

また、金を盗んだ大谷を追ってきた椿屋の店主たちは、そこではじめて妻のさっちゃんと出会い、以下のように呟いている。

「こんな立派な奥さんがあるのに、どうして大谷さんは、あんなに、ねえ」/「病気だ。病気なんだよ。以前はあれほどでもなかったんだが、だんだんわるくなりやがった」¹⁵

上記から分かるように、さっちゃんと夫婦でいるからといって大谷の性格は改善されなかったどころか悪化していたのである。これは大谷の性根の問題でもあるが、さっちゃんが大谷の所業を咎めることなく受け入れ続けていたことも理由として考えられる。元々家庭への干渉が少ない大谷が、外でどう振る舞おうとさっちゃんにとっては大した問題ではない。また、無策であるにも関わらず夫の借金の返済を請け負ったときもさっちゃんは「夜が明けなければいい」¹⁶とは思ひこそすれ、大谷への呆れや怒りを口に出さないどころか抱いてもいない。なおⅢ章でも述べたが、さっちゃんが大谷を否定することはない。ただ、さっちゃんを一番に悩ませるのは息子の子育てであり、困窮した家計であり、大谷ではないのだ。二人はお互いにいがみ合うわけでも、疎ましく思うわけでもなく、ただ単に互いへの関心よりも優先している事物が異なるだけなのである。さっちゃんは家庭を、大谷は遊びを優先させているのだ。同じ方向へ進んでいるが逆方向を向いている、それがこの夫婦なのである。

¹⁴ p105

¹⁵ p111-p112

¹⁶ p124

(2) 椿屋で働き出してからの夫婦関係

本編中盤でさっちゃんは屋台を営む父親を持ち、その手伝いを長らく行っていたため元々接客が得意だということが判明する。実際に椿屋で働き始めたさっちゃんは客の下世話な冗談を軽くいなし、愛嬌をふりまきつつ手際よく客をさばくなど、店主も認める仕事ぶりを発揮している。さっちゃんには元来、社会というコミュニティの中でやっていくだけのポテンシャルが備わっていたのである。

椿屋で働き出すまでのさっちゃんの暮らす社会は極めて限定的であった。それはさっちゃん自身と大谷と息子の三人によって構成された世界だ。ところが「椿屋」で働き始めたことによってその範囲は広がりを見せる。店主夫妻や様々な客たちとの交流を経ることでさっちゃんの内向きの世界が外向きへとシフトしたのである。個人にとっての社会が広がるということは、今までに知り得なかったことが自然と入ってくるということと同義だ。椿屋で様々な客と接するうちにさっちゃんは「椿屋にお酒を飲みに来ているお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだということに気がついて」¹⁷しまう。そして酒売りが水酒を売ってきたことが発覚した際に、「誰しものがわが身にうしろ暗いところが一つも無くて生きていく事は、不可能」¹⁸であることを悟る。物事に対し客観的で素直であったさっちゃんは、疑うことを知ったのだ。「疑う」、これこそが大谷の「原罪意識」の元となっている感情である。つまり、さっちゃんが誰かを疑うことではじめて大谷の底知れぬ不安に触れることが可能となったのだ。

「やあ、また僕の悪口を書いている。エピキュリアンのにせ貴族だつてさ。こいつは、当たっていない。神におびえるエピキュリアン、とでも言ったらよいのに。さっちゃん、ごらん、ここに僕のことを、人非人なんて書いていますよ。違うよねえ。僕は今だから言うけれども、去年の春にね、ここから五千元持って出たのはさっちゃんと坊やに、あのお金で久しぶりのいいお正月をさせたかったからです。人非人でないから、あんな事も仕出かすのです」¹⁹

さっちゃんが「椿屋のさっちゃん」として親しまれていくようになったある日、彼女は客に手籠めにされてしまう。しかし普段通りを装い、そのことには触れずに大谷と会話を交わす。何も気づかぬ大谷は、新聞に書かれた自らへの批評に上記の引用のように反論し、自分のまっとうさを訴える。ところがさっちゃんの返答は「格別うれしくもなく」、「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」²⁰という非常に醒めた視点から発せられるものであった。誰しものが「うしろ暗いこと」を抱いているのであれば大谷が善人であろうとなかろうとさっちゃんには関係がない。だから彼女はそう答えたのである。野口富士男がこのさっちゃんの答えに対して「『ヴィヨンの妻』の結びの言葉に、『生への執着』を読み取るような読者は、太宰氏の魂に無縁の人であらう」²¹と述べてい

¹⁷ p139

¹⁸ 同上

¹⁹ p144

²⁰ 同上

²¹ 野口富士男「苦悩の末」（1948年）長部日出雄編『群像 日本の作家 17 太宰治』（小学館 1991年 p265）

るとおり、この場合の「生きる」は前向きな意味合いを持たない。そして『人非人』を自認する妻は『私たち』と語る²²。さっちゃん自身が「うしろ暗いこと」を抱えたことでこの夫婦は「人非人」であることを共有し、「生きていくしかない」という同じ方向を向いて進むことができるようになったのである。

V 「大谷夫婦」の幸福

幸福とは何かを定義づけることは難しい。物事の幸福さを見定めるときは、何を幸福の基準に置くかを決めなければならない。家庭という狭小で閉鎖的な空間において、夫と妻の関係は幸福の度合いに関わる大きな要素だ。お互いがお互いを労り、協力し、家庭を築き上げる。そのような暖かさの感じられる夫婦関係と、「大谷夫婦」の関係とは似ても似つかない。彼らは互いにできる限り無干渉で、家庭を受け持つのは妻のさっちゃんのみである。夫は妻の「素直な寛容さ」に救われ、妻は夫を受け入れ続ける。しかしこれは一方的な行為ではない。相手がいなければ成立不可能なのだ。そしてこれらが恒常的に行われていることで、相手への猜疑心は薄れていく。すなわち相手と自分との関係に「安心感」が生まれ得るのである。そして大谷夫婦はそれ以上の幸福を求めようとはしない。確かに得られる「安心感」、ただそれだけが、二人をただ単に不幸な夫婦にはさせないのである。

義による救済が不可能ならば、夫の背徳や無頼を救えるのは妻の日常的な優しさ＝柔和な眼でしかない。妻だけが夫を真に罰しうるのだから……。²³

「家庭のマリア」²⁴は罪人を許すとともに彼を罰し続ける。変わらず接する妻の姿に夫は自らを否定し、そしてまたその妻の姿に肯定されるのである。疑う必要のない夫婦関係はつまり無条件に相手を信じることができる夫婦関係と言い換えることができる。疑うことを知ったさっちゃんと、常に他人を疑っている大谷にとって、疑わないことは一種の現実逃避とも呼べる行為だ。互いを支え合う夫婦が幸福ならば、大谷とさっちゃんはこの上なく幸福な夫婦と考えることが出来るだろう。この夫婦には目立った「暖かさ」はなくとも、それ以上に底冷えするような「冷たさ」がある。「冷たさ」の心地良さを共有し、暮らしていく。「冷たさ」を確かに感じられるからこそ、そこにある幽かな「暖かさ」が際立ち、それを確かなものとし得るのだ。

(6668文字 原稿用紙16.7枚相当)

²² 猪熊郁子「『ヴィヨンの妻』論：その倫理の所在をめぐって」（『日本文学研究』1983年 p166）

²³ 三好 前掲書 p177

²⁴ 同上

【参考文献】

- ◆福田清人、板垣信『人と作品 1・太宰治』（清水書院、1966年）
- ◆三好行雄「ヴィヨンの妻」（1974年）長部日出雄編『群像 日本の作家 17 太宰治』（小学館 1991年）
- ◆野口富士男「苦悩の末」（1948年）長部日出雄編『群像 日本の作家 17 太宰治』（小学館 1991年）
- ◆猪熊郁子『『ヴィヨンの妻』論：その倫理の所在をめぐって』（『日本文学研究』1983年）
- ◆榊原理智「太宰治『ヴィヨンの妻』試論—『妻』をめぐる言説—」（『日本近代文学』第54号 日本近代文学会 1996年5月 p.108-122）
- ◆姜辰根『『ヴィヨンの妻』論—語られる泥棒詩人—』（『中央大學國文』第47号 2004年3月 中央大學國文學會 p.75-83）
- ◆山崎正純『『ヴィヨンの妻』—『妻』は語るができるか』（『国文学 解釈と鑑賞』第72巻11号 至文堂 2007年 p.169-174）
- ◆永吉寿子『『編制』される〈私たち〉の婚姻—太宰治『ヴィヨンの妻』論—』（『百舌鳥国文』第18回 大阪府立大学 2007年3月 p.57-71）